

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25463530

研究課題名（和文）看護系大学におけるコアカリキュラムに応じた小児看護学教育の実習コアモデルの開発

研究課題名（英文）To Develop an Essence Model for Student Learning and Student Support in Undergraduate Pediatric Nursing Practice

研究代表者

川名 るり（KAWANA, RURI）

日本赤十字看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：70265726

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では現代の多様化する小児看護に対応できる看護師育成を目指し、小児看護学実習における学生の学びとその支援のためのモデルを開発することを目的として、文献検討、調査研究を実施した。その結果、教員は子どもの反応や家族の存在といった成人患者とは異なる小児看護の臨床状況に戸惑う学生の悩みや関心事を知り、学びのエッセンスを見通しながら問いかけ、説明し、承認することが重要であり、臨床指導者は学生が小児看護特有の場面を見学や体験できる機会を準備し、実践者としてのモデルを示すことが重要であることが明らかになった。それらを踏まえ、教員と臨床指導者が黒子となって学習環境をデザインするためのモデルを開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to develop an essence model to encourage and support students' learning in undergraduate pediatric nursing practice. Unlike adult patients, students were unable to deal with clinical situations including child's reactions and involvement of the family. Concerning essence of support it was important for the faculty to see the students' concerns and interests, and ask questions, explain, and approve the students while envisioning the essence of learning. It was important for clinical educators to create opportunities where students can observe and experience scenes characteristic of pediatric nursing and show them a model as pediatric nursing practitioner.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児看護学 看護系大学 実習 コアカリキュラム モデル 学び 開発 子どもと家族の看護

### 1. 研究開始当初の背景

近年、日本では子どもを取り巻く社会情勢や医療事情が変化している。子育てをめぐる社会的問題は児童虐待による子どもの死亡やいじめによる自殺が増加するという形で表面化している。家庭で子どもの手当をできずに救急外来を受診する親は、今なお増加し、東日本大震災による放射能などの新たな恐怖が、保護者の育児不安や避難生活でのいじめに拍車をかけている。子育て社会の厳しさが増す現代社会において、子どもと家族に対する細やかな対応が求められている。

他方では、平成 22 年に改正臓器移植法が全面施行された。小児の臓器移植が認められ、子どもの権利を擁護する重要課題が看護師へも課せられている。このように現代の子どもと家族への看護における社会的ニーズは、極めて多様化している。

しかし、少子高齢化に伴う小児病棟・外来等の閉鎖や縮小が進められてきた日本の医療事情の変化の中で、子どもと家族への対応は混合病棟や一般外来、小児科のない病院でも迫られるようになった。もはや子どもと家族への看護は小児病棟等に特化されるのではなく、さまざまな場で展開され、領域を問わず看護師に必要な看護力として求められている。一方で、苦慮する現場の様子も報告され始めた。平成 10 年に 64 校であった看護系大学数が 203 校（平成 24 年 5 月研究開始当初時点）へ急増した今、基礎教育の段階から、現代社会の子どもと家族の多様化した事情を認識し、対応を考えられる看護師の育成を目指す必要がある。これは看護系大学における責務であると考えられる。

平成 21 年に文部科学省の検討会では看護学基礎カリキュラムが検討課題として提案された。以降、看護系大学ではコアカリキュラムが導入された。看護専門職の基礎を教授する教育を保証し、さまざまな場や利用者のニーズに対応できる応用可能な能力の養成をめざすもので、従来の専門領域中心の教育から、コアとなる看護実践能力育成の教育へと視点の転換がなされた。まさに、現代の多様な小児看護の展開の場や、求められるニーズに対応できる能力育成のための教育が期待できると考えられた。

ところが、コアカリキュラムの実働は各大学に責任が任されており、これまでの小児看護学という専門領域中心の教育内容をコアカリキュラムへ具体的にどのように同調させるかまでは言及されていない。教育方法の視点の転換は、実習においても同様に求められるはずであるが、実習方略についての言及も皆無にひとしい。子どもとその家族に接する経験の乏しい現代の看護学生が、言語能力や認知能力が未熟で言動の予測が難しい子どもを理解するためには臨地実習が最も有効な方法であるが、小児看護の実習時間はさらに短縮傾向にある。

そこで、研究代表者は小児看護学教育の実

習コアモデルを開発することに着手する必要があるという考えに至った。これは、看護系大学におけるコアカリキュラムに即したもので、いかに効果的に現代の子どもと家族へ対応できる看護師を育成するか、そのコアとなる具体的な小児看護学基礎教育の実習モデルの構築を目指すものであった。

### 2. 研究の目的

本研究では、看護系大学におけるコアカリキュラムに応じた小児看護学教育の実習コアモデルを開発するために、以下のような研究を実施した。

(1)文献検討を行い、看護系大学における小児看護学実習の現状と課題についてデータを収集した。

(2)臨床指導者、教員、学生への調査研究を行い、小児看護学実習における学ぶ側と教える側、それぞれの立場から見た学習環境の現状、課題、展望等を明らかにした。

(3)(1)(2)を統合し、小児看護学実習における学生の学びと学習支援のための実習モデルを開発した。

### 3. 研究の方法

本研究は平成 25 年度からの 4 年間にわたり、4 つの構成で研究計画を設定した。

(1)文献検討（平成 25 年度実施）

1996 年のカリキュラム改正から、10 年経過した 2007 年から 2013 年までの国内文献について医学中央雑誌 Web にて文献を検索した。検索された 3,238 件のうち、看護系大学における小児看護の実習に関連する文献のみを抽出し、最終的に 115 文献を得て検討した。

(2)調査研究（平成 26、27 年度実施）

(1)の結果を踏まえ、調査を 3 段階で実施した。看護系大学の小児看護学実習指導経験があり、協力の得られた小児看護専門看護師を対象にインタビューを実施した。なお、小児看護専門看護師を選定したのは、彼らが、病院内を横断的に活動し、管理的、教育的視点を持って小児看護に求められる多様なニーズに対応していること、さらには、小児看護の臨床状況を鑑みた上で、改めて基礎教育終了時に期待している学生の学びを語ることができると考えたからであった。看護系大学の小児看護学実習指導に 5 年以上携わっている教員を対象にインタビューを実施した。看護系大学の小児看護学実習において学びの実感を得た経験のある学生を対象にインタビューを実施した。

(3)実習モデルの構築（平成 28 年度実施）

(2)の 3 段階の調査結果で得られた研究成果を統合し、小児看護学実習だからこその学びという視点で改めて質的に分析して、学生、教員、指導者それぞれの立場から学生の学びを促すエッセンスを抽出した。

(4)知識共有への取り組み(平成28年度実施)  
成人病棟で子どもと家族の看護に携わる看護師との知識共有を図るために、整形外科看護雑誌での小児看護の連載を企画し、知識提供を試みた。

#### 4. 研究成果

##### (1)文献検討

看護系大学における小児看護学実習の現状と課題について分析した。その結果、学生の学びを明らかにした先行研究は多いものの、学びがどのように達成されたのか、臨床場面において教員、臨床指導者が具体的にどのようにかかわっているのか、その過程が記述されたものはほとんどないことがわかった。学びに至るプロセスとその支援方法、三者の間にある乖離とその対処方法について考えていくことが課題として見いだされた。さらに、病棟や外来に加えて、療育施設、クリニックなど実習施設が拡大している現状の中で教員が実習施設に同行できないことから、どのように実習指導の質を担保していくかが共通の課題となっていることが見いだされた。

##### (2)調査研究

3段階で実施した調査の結果、小児看護専門看護師は、学生が小児看護学実習だからこそ体感できる「子どもってこうなんだ、わかった」という子どもと家族の特徴を実感する体験が、その後の子どもと家族への関心や思考、看護の実際につながる重要な第一歩になると考えていることが明らかになった。教員は、子どもからの言語的反応が少ない小児看護学実習だからこそ、学生が無力感に陥りやすいことを気かけ、学生自身が自らの成長を感じられるような学びへの支援、達成感への支援を重視していることが明らかになった。学生は、学生自身の気がかりが解消される瞬間に子どもと家族への理解を実感していた。それに先立つ時間の中では悩み、戸惑い、指導者や教員にやってもらうことを繰り返す。しかしながら、それらすべては学生にとって自分自身が主体となった体験として形づけられていることが明らかになった。学生本人が主体となる体験であることによって、学びへの転換につながるようになった。

##### (3)実習モデルの構築

文献検討、それぞれの調査研究で得られたデータを統合し、学生自身、教員、指導者それぞれの立場から学生の学びを促すエッセンスを抽出した結果、まず、小児看護学実習における学生の学びのエッセンスとして、4つの過程が明らかになった。第一に、学生が子どもの特徴について知ること、第二に、学生が子どもの立場に立って子どもの体験を捉えること、第三に、学生が看護の視点からその子どもと家族を理解し、看護実践を見出

せること、第四に、学生が子どもと家族の看護への思考が深まることであった。これらの過程の中で、学生の学びへの転機はいつでも起こりうるものであること、そして、どこで転機するかは学生の気がかりを中心に訪れていることが明らかになった。

学習支援のエッセンスとして、教員は子どもの反応や家族の存在といった成人患者とは異なる小児看護の臨床状況に戸惑う学生の悩みや関心事を知り、学びのエッセンスを見通しながら問いかけ、説明し、承認することが重要であることが見いだされた。臨床指導者は学生が小児看護特有の場面を見学や体験できる機会を準備し、小児看護の実践者としてのモデルを示すことが重要であることが見いだされた。

以上を踏まえ、小児看護学実習における学生の学びと学習支援のためのエッセンスモデルを作成した。なお、モデルの全容は冊子版研究成果報告書に掲載した。

##### (4)成果の位置づけとインパクト

現在の日本の小児医療事情は、混合病棟や一般外来、小児科のない病院でも子どもと家族が来院するため、通常は成人看護を対象にしている看護師でも子どもの看護に携わらなければならない。しかし、現代社会の変化に対応するための看護師教育や基礎教育については国内外を含めて言及されている先行研究はほとんどみあたらない。米国は看護系大学の歴史も古く、短い実習期間や高度医療のなかで実習が行われており参考になるが、小児医療の縮小化、特に、混合病棟化などの医療事情や少子化・育児事情は日本独特の文化が反映されているため、米国の教育がただちに日本に適用できるものではなかった。日本の文化に対応した小児看護学実習のモデル開発が不可欠とされている。

そのような中、本研究では学生の学びの過程を明らかにし、そこへ小児看護学実習の学びのエッセンスを見通して、学生の学びへの転換を引き起こすための学習支援のモデル、すなわち、学習環境をデザインするモデルを提示した。このことは、これまで可視化されていなかった支援方法を具体的に示すことにつながったと考えられる。今後の学習支援に向けて、新たな準備を整えることができた。

##### (5)今後の展望

本研究の成果は、研究期間中にすでいくつかの学術集会で発表し、雑誌論文等として刊行されている。また、4年間の研究成果および構築した実習モデルを掲載した冊子を刊行し、全国の看護系大学図書館、看護系大学小児看護学領域、小児専門病院などへ送付した。今後は、実習モデルを活用して評価を行い、さらに洗練させていくことを継続して進めていきたい。

本研究を通して、看護基礎教育の小児看護学実習の中で、「子どもってこうなんだ」と

実感を伴いながら子どもの特徴を理解できることが、その後の子どもの看護へのイメージ形成につながり、それが卒後の子どもへの看護実践にも影響することが明らかになった。今回、成人病棟で子どもと家族の看護に携わる看護師と知識共有を行ったなかで明らかになったことのひとつに、基礎教育のみならず卒後教育においても同様に、子どもと家族へ関わる看護師を支援することの必要性がある。それゆえ、今後、臨床現場での課題を視野に入れ、卒後教育につながる小児看護学教育の学習環境のあり方を問うことに着手していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

川名るり、吉田玲子、太田智子、江本リナ、鈴木健太、鈴木翼、山内朋子、筒井真優美、子どもと家族に関わる全ての看護師に求められること これからの小児看護につながる小児看護学実習の課題、日本小児看護学会誌、査読有、26巻、2017、pp.15 - 25

DOI : 10.20625/jschn.26\_15

太田智子、川名るり、吉田玲子、江本リナ、鈴木健太、鈴木翼、山内朋子、筒井真優美、小児看護専門看護師が考える小児看護学実習における学生への支援、日本小児看護学会誌、査読有、26巻、2017、pp.38 - 44

DOI : 10.20625/jschn.26\_38

吉田玲子、川名るり、太田智子、江本リナ、鈴木健太、鈴木翼、山内朋子、筒井真優美、小児看護専門看護師が考える小児看護学実習でめざす学生の学び、日本小児看護学会誌、査読有、25巻2号、2016、pp.53 - 60

DOI : 10.20625/jschn.25.2\_53

[学会発表](計10件)

Ruri Kawana、Tomoko Yamauchi、Reiko Yoshida、Hitomi Fuma、Kenta Suzuki、Tomoko Ota、Rina Emoto、Yuu Amano、and Mayumi Tsutsui、Process of Learning for Students in Undergraduate Pediatric Nursing Practice. The 3rd International Society of Caring and Peace Conference、2017年3月25・26日、久留米シティプラザ(福岡県・久留米市)

Ruri Kawana、Reiko Yoshida、Tomoko Yamauchi、Tomoko Ota、Kenta Suzuki、Rina Emoto、Mayumi Tsutsui、Hitomi Fuma、and Yuu Amano、Essence Model for Student Learning and Student Support in Undergraduate Pediatric Nursing Practice. The 3rd International Society of Caring and Peace Conference、2017年3月25・26日、久留米シティプラザ(福岡

県・久留米市)

Ruri Kawana、Reiko Yoshida、Tomoko Ota、Rina Emoto、Tsubasa Suzuki、Kenta Suzuki、Mayumi Tsutsui、and Tomoko Yamauchi、Elements Required for Nurses Who Interact with Children and their Families from the Perspective of Certified Nurse Specialists in Child Health Nursing. The 2nd International Conference on Caring and Peace、2015年11月7・8日、日本赤十字看護大学(東京都・渋谷区)

Ruri Kawana、Reiko Yoshida、Rina Emoto、Tomoko Ota、Tomoko Yamauchi、Wakana Tsukahara、Mayumi Tsutsui、and Miho Hashimoto、Content Taught by Faculty and Clinical Educators in Undergraduate Pediatric Nursing Practice in Japan. 35th International Association for Human Caring Conference、2014年5月24 - 28日、国立京都国際会館(京都府・京都市)

[図書](計1件)

川名るり、株式会社ワコー、看護系大学におけるコアカリキュラムに応じた小児看護学教育の実習コアモデルの開発(研究成果報告書) 2017年、129頁

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

川名 るり (KAWANA, Ruri)  
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号 : 7 0 2 6 5 7 2 6

(2)研究分担者

筒井 真優美 (TSUTSUI, Mayumi)  
日本赤十字看護大学・看護学部・名誉教授  
研究者番号 : 5 0 2 3 6 9 1 5

江本 リナ (EMOTO, Rina)  
日本赤十字看護大学・看護学部・教授  
研究者番号 : 8 0 2 7 9 7 2 8

太田 智子 (OTA, Tomoko)  
日本赤十字看護大学・看護学部・助教  
研究者番号 : 8 0 7 1 1 0 9 3

吉田 玲子 (YOSHIDA, Reiko)  
日本赤十字看護大学・看護学部・助教  
研究者番号 : 8 0 7 3 5 0 4 3  
(平成26年度より研究分担者)

山内 朋子 (YAMAUCHI, Tomoko)  
日本赤十字看護大学・看護学部・講師  
研究者番号 : 7 0 4 6 0 1 0 2  
(平成27年度より研究分担者)

橋本 美穂 (HASHIMOTO, Miho)  
日本赤十字看護大学・看護学部・助教

研究者番号：80613934  
(平成25年度のみ研究分担者)